町民参加の町史づくり

竹富町史だより

1996.3.29(金)
第9号

竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目次

第十一回編集委員会……(1)
官報登載沖縄県関係資料……(2)
沖縄県地域史協議会研修会……(2)
《戦さ場の実相》
護郷隊の思い出……(3)
空襲を避けて農作業……(10)
避難途中に敵機襲来……(11)
《写真に見るわが町》
八重山義勇軍西表独立中隊……(13)
戦争関係資料紹介……(14)
《新聞で知る町の今昔》
招魂祭……(16)
《戦跡をたずねて》
船浮の海軍壕跡……(17)
《文化財探訪》
マシュク村遺跡……(18)
収蔵図書紹介……(19)
業務日誌……(23)
編集後記……(26)

●表紙の写真●

日本政府の西表島農業資源調査が1960年（昭和35年）に実施された。調査団は林四郎氏（三人のうち左端）を団長に40日間にわたり、西表島の開発等の方向性について様々な調査を行った。調査の途中、由布島の上空でヘリコプターが行方不明になり、西表島に不時着するという災難もあったが、全員無事で調査を終了した。

☆題字　大　城　正　明

第十一回町史編集委員会を開催

―「戦争体験記録」収録項目の決定―

竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」の発刊に向けた第十一回編集委員会が、昨年十二月九日午前十時から町史編集室で開かれました。

「戦争体験記録を最終審議した第11回編集委員会

「戦争体験記録」は、一九三一年（昭和六年）の満洲事変から始まる十五年戦争を視野におき、太平洋戦争及び太平洋戦争の中の沖縄戦、さらに八重山戦の実相と、それにかかわった住民や将兵等の真実を正しく記録し、戦史の証言記録として後世に伝え、反戦平和の礎にするために刊行するものです。

編集に向けては、戦時中の全世帯を対象にした戦災実態の悉皆調査及び戦争体験者からの手記の募集、聞き取り調査を行なうほか、町保存の軍援護関係資料、小学校沿革誌、旧日本軍関係資料、戦争に関する新聞記事等も収集しました。編集委員会では先に専門小委員会でまとめた素案を審議しました。

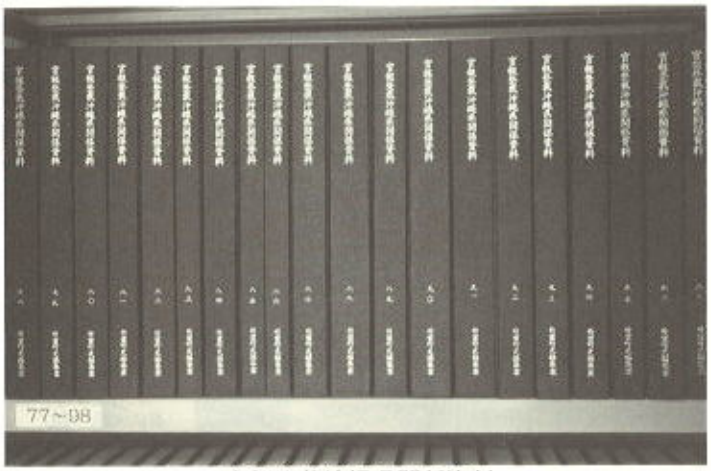
編集構成は全体的に第一章に「住民の戦争体験記録」を設定し町全体の戦争解説、島別戦没者実態総括表、島別・年齢別・性別戦没者実態総括表を盛り込み、さらに具体的に島単位で島じまの戦争の様子、集落地図、世帯別戦災実態一覧表、戦没者名簿、戦争体験記を配しました。

第二章は通史的は意味合いを持たせ「竹富町の戦況と戦後復興」と題し、第一章の手引きとなるようにしました。内容は（一）「戦争の経過」の項目では、戦争への道、船浮要塞の建設、沖縄戦の始まりと展開、八重山守備軍の設置、防衛隊の召集などを入れ、（二）「戦時下の住民」の項目では、米英軍機による空襲、強制疎開とマラリア、食糧難と生活などを盛り込み、（三）「戦後の復興」の項目では、ゼロからの出発、疎開地及び外地からの引き揚げ、新天地を求めて、などを設けました。

編集委員会の審議事項は目次、凡例を議題をして上げ、一部修正して決定しました。印刷製本仕様は事務局が説明しました。総ページ数は今後の戦争体験手記の募集、聞き取り調査を含めて最終的に一千ページを超えることが確認されました。本巻は平成七年度に発刊されます。

官報登載沖縄県関係資料を購入

―二百四十七冊をマイクロ複製本―



官報登載沖縄県関係資料

竹富町史第十巻資料編『近代・前近代』の発刊に向けて、町史編集室では様々な史資料を収集しているが昨年、沖縄県に関係する『官報』のマイクロフィルム複製本を購入した。総量は大きさB4版で、総冊数二百四十七冊に及ぶ。一八八三年（明治十六年）六月から一九四五年（昭和二十年）六月までにわたる多彩な事項が掲載されている。

『官報』は政府が法令、告示、叙任、辞令、その他多くの新事項を国民に知らせるために編集記載して、印刷局から日々刊行する印刷物であり、重要な文書資料のひとつに数えられている。

県地域史協議会では『官報』の資料的価値の重要性に鑑み編集、町史編集室でもこれを認識し、所蔵資料のひとつに加えた。記載事項は官報の編集の性格上、他府県の事項もあるが、沖縄県に関する事項は蛍光ペンでマークを付け、一目で確認できるよう配慮した。竹富町関係では炭鉱に関する事項などが載っている。

沖縄県地域史協議会研修会

―名護市で開催―

沖縄県地域史協議会（泉川良彦代表）の一九九五年度第三回研修会が二月九日、名護市で開かれた。今回のテーマは「展示・戦後五〇年」。昨年、県内では戦後五十年にちなんだ様々なイベントが実施された。

研修会では最初に泉川代表、比嘉敏雄名護市教育委員会教育長のあいさつがあり、引き続き県立博物館の萩尾俊章・学芸員が「戦後五十年関連展示会と戦後資料」と題し講演を行なった。萩尾氏は「戦後資料をまとめるには苦労もあるが、物質文化に対する関心を持ち、利用することも大切」と強調した。

報告は豊見城村史、那覇市歴史資料室、名護市史、今帰仁歴史文化センターが昨年開催した展示会を紹介、展示する資料収集の苦労などが話された。研修会に先立ち、久志を中心にした史跡巡検も行なわれた。

《戦さ場の実相》
—島じまの語り部たち—

護郷隊の思い出

大嵩善立

◆護郷隊に入隊

私は戦争中、西表島西部にあった護郷隊にいたが、入隊したのは昭和一九年一二月八日だった。隊員は小浜島、竹富島、黒島、新城島、鳩間島の五島から召集された一〇代の若者であった。入隊式は八重山農学校の運動場で行われ、私たちは式が終了してすぐ、輸送船で西表島の船浮港に入港した。輸送船は船足が遅いため、到着すると夜になっていた。船浮に上陸した後、暗闇の中をボートで祖納の前泊の浜に漕ぎ出し、着いた後、祖納部落に入った。

私が護郷隊に入る時、竹富村役場の兵事係から発送された召集令状があった。それは強制的なもので、拒否することは出来なかった。「何月何日までに入隊しなさい」というわけだった。隊員として集まった人たちは、入隊式が済んで西表島西部に渡ったが、地元の白浜や祖納、星立からの人は現地入隊となった。地元からの入隊者はそれぞれ一人で、護郷隊の隊員は約六〇人ぐらいだったと記憶している。

私はその頃、護郷隊とはどういうものであるのか、ということを知らなかった。何も分からないまま入隊した。護郷隊本部の設けられた場所は、現在ある西表郵便局と同じ所で、当時、そこには兵舎があった。西表島西部には当時、船浮要塞が建設されていて内離島、外離島等に施設が置かれていたが、主力部隊は石垣島に移動していた。護郷隊は要塞の主力部隊が移転して後に入って来た。

私たちは護郷隊に入った後、軍服を支給されたが、サイズの大小は関係なかった。軍服の大きさは様々で、着ける人によって窮屈だったり、ダブダブだったりしていた。隊員の中には私のような若い人のほか、中国戦線から島に戻り、その後に護郷隊に入って来た人もいた。その人たちは三〇歳代で召集され、伍長とか兵長で私たちを指導していた。それに大正一五年生れの人たちもいたが、その人たちは検査を受けてすぐ、石垣島にダンベーに乗って連れて行かれた。護郷隊は、その後、昭和二年生れ、三年生れの若者だけになったが、大正一五年生が石垣島に渡ったので、交替用員として昭和四年生れの人たちが隊員として入隊することになった。

その時、護郷隊で問題になったのは、昭和四年生れの人をどのようにして祖納まで連れて来るのか、ということだった。昭和二〇年になると、空襲は私たちが入隊した時よりも一段と激しくなっていた。入隊するにも容易ではなかった。

私は不寝番している時に上官に呼ばれた。護郷隊は山中に陣地を構築してあった。船浦の後方にあるテドゥ山にも陣地が造られた。上官は私に「テドゥ山の道を知っているか」と言った。「分かります」と私は答えた。

私は不寝番をすることになっていたが、

翌日、出発するということで持物の準備をしなければならず、そして「当番を替って来い」と言われた。その時、上官と一緒に行くことになっていたが、その人は山道を知らなかった。

私は上官とともに由布島に行き、そこから小浜島に渡り、入隊する若者を連れて来ることになった。それは、山中の陣地としてテドゥ山が近いから、そこに入隊する人たちを連れて来い、というのだった。上官には小浜島出身の与那城貞雄さんが付いた。私たちは武装して、鉄砲の弾丸も一週間ぐらい、それに食料も持って行った。当時はとてもひもじい思いをしていた。

船浮要塞の兵舎

私は小浜島に行くと決った時、食料にありつけると喜びを感じ、それに親にも会えると思って嬉しくなった。私たちは真夜中の午前一時に兵舎を出発し、二人で手さぐりをしながら浦内川近くの炭鉱の山道を通り、上原に抜けて歩いた。山路や海岸を歩き、海を渡って小浜島に着いた。

私たちは小銃を手にしており、与那城伍長は入隊する昭和四年生を集め、サバニに乗って西表島に渡り、山道を歩いて陣地にたどり着いた。

◆様々な訓練

護郷隊では訓練があった。私たちは大正一五年生と一緒にやった。訓練はいかにして敵を殺すか、ということが中心だった。私は体が小さいから、着剣した鉄砲を持っては米兵に太刀打ち出来ないということで、訓練は爆弾の真管や火薬線の結び方などを教えられた。それに人の殺し方とか、盗人の仕方などの訓練も受けた。

盗人の訓練は、敵地に侵入して陣地内にある物資など、何でも盗んで来るというものだった。人殺しの稽古は、私のような体の小さい兵隊は夜間、こっそりとダイナマイトを敵の陣地に据え付けて発火させ、陣地もろとも爆破させるような訓練を受けた。

訓練はダイナマイトを据え付けて発火線を延ばし、火を付けると線は一秒間に一センチほど燃え進む。発火線の長さはダイナマイトを据えて逃げるまでの時間を計算して決めなければならなかった。計算を誤ると、自分も爆弾とともに吹っ飛ぶ。ダイナマイトが爆発する時間は、逃げ切るまでの時間を頭に入れて行動しなければならなかった。

爆弾は大木の根っこに据え付けて爆破させたり、火薬の量を変えて爆発する威

力も知る、真管の数も変える、そして爆破させる、そのような訓練が中心だった。護郷隊の陣地はウシュク森、祖納岳、次ぎにテドゥ山、ゴザ岳、波照間森に構築し、そこに食料や迫撃砲などの弾丸、機関銃や小銃の弾丸、それに手榴弾が置かれていた。私はそれを運んだ。

陣地の小屋は苫屋だった。陣地には鎌がないため、材料の茅は手で引き抜いて苫を編むが、それは体の大きさや年齢に関係なく、一人一苫と決められていて、懸命になって茅を引き抜いた。この作業は本当に大変だった。

体が大きく、力のある人は茅を引き抜くのは早いが、体力のない人は、それこそ大変だった。早めに自分に与えられた量を確保した人は、休息をとっていた。体力のない人は遅く、自分の量を確保するのに時間がかかり苦労した。陣地の小屋は約二〇平方メートルの広さで、ここに頭を並べて寝た。

私は護郷隊ではあらゆる仕事をしたが、荷物の運搬もあった。荷物で最も運びづらかったのは樽入れの醤油だった。これは丸い形をしているため、縄でくくって担ついでも腰にピタリと合わないし、中身は液体であるためザブン、ザブンと音を立てて運ぶのに非常に苦労した。樽入れ醤油を担いで一〇キロから一五キロの距離を歩いて山中の陣地まで山を登ったり、下ったりするが、これが難儀だった。体力がなく担ぎにくいため、運ぶことができず、泣く人もよく見られた。

護郷隊で訓練を続けているうちに、空襲が段々と激しくなってきた。陣地には玄米や平麦、乾パン、白糖などの食料があったが、食べさせなかった。それは長期戦に備えて、食料を大切にしなければならない、ということが理由だった。戦争は何年続くか分からない。持久戦に備えて食料を確保し、大事にしなくてはならない。食料がないと戦争には勝てない。

私たちの食事は、常日頃は茶碗一杯のご飯だった。その頃、ちょうど船が遭難して来て、大豆やアルコールがあった。そのため大豆を玄米に混ぜて食べた。私たちは若いため食べ盛りだ。しかし食事は茶碗一杯の御飯で、これでは満腹になるはずがなかった。

護郷隊に入隊した当初はそうではなく、腹いっぱい食べることが出来た。入隊した当時は訓練した後、夕食などに御馳走があった。その時、「護郷隊に入ってよかった」と思った。隊員は訓練を受けながらも、祖納半島の上部の方に畑をこしらえて、イモを植えた。しかし、空腹であるため、イモを盗んで生で食べることもあった。何しろ食料を確保するのが何よりも大事だった。

護郷隊では五十嵐軍曹、鈴木軍曹が指揮をとっていた。隊長は最初、今村中尉だったが、後に横田大尉に替った。今村中尉は中隊長になった。訓練は相当きついものだった。しゃくとり虫のように動く訓練があったが、これは腹ばいになって両腕を前に立て、お尻を突き出したり、低くしたりしながら前進する動作だった。

鉄砲を腕で抱えて持ちながらの訓練であるため、鉄砲が重く本当に難儀だった。しゃくとり虫訓練が出来ないと上官から叩かれた。その訓練は西表校の運動場で行い、苦痛だった。

訓練は様々あったが、最も苦しかったのは、陣地構築、それに物資の運搬、夜間に行なう「非常起こし」だった。それは不審番が大声を出して寝ている隊員を起こし、非常時に備える訓練であった。私たちは寝る時、枕元に銃などを置いてあり、「起きろ」の合図で隊員の服装に着替え、銃を手にして集合した。集合した後に点呼があった。この訓練があるため、落ち着いて寝ることが出来なかった。

私たちには護郷隊員として軍服が支給されているが、新品ではなかった。靴は大きくて足に合わず、それに左右同じ、軍服も大きめでダブダブしていて、ちゃんとしたものではなかった。

早朝の「非常起こし訓練」でこういうことがあった。これは支給された軍服、靴がいかにいい加減だったものだったかを物語るものだ。ある隊員が靴を履いて早朝の点呼に集合した。上官が「右足を出せ」と言うと、確かに右足を出しているが、履いている靴は左足のものだった。上官はこれを見て「貴様、右足というのに左足を出している。やり直し。気をつけ」と言って命令するが、右足に左足の靴を履いているため、やり直しを命じられてもまた同じだった。

上官はこの隊員を叱り飛ばしたが、後は呆れてしまった。しかし、よく見ると左右の靴が反対になっていたことが分かった。後になって上官も気が付いて苦笑いをしていた。私たちに支給された軍服は中古品で、今考えると新品を揃えるまでには、それなりの期間が必要であるためその間、使い古した物で我慢しなさい、と私たちに与えたと思う。そのため軍服は袖が長い物、膝から下が破れていたりしているものなどさまざまだった。破れた箇所を繕うと思うが、何しろ針がない。そのため破れた個所をワラで縛って応急処置をした。だが私は昭和四年生を小浜島から連れて来て時に、針や糸を持って来たので、それを用いて破れ個所を直して着けた。

西表島西部には当時、朝鮮の船が漂着していた。その船には大豆が積まれており、私たちはその大豆を兵舎に持って来たが、どのようにして運んで来たのは分からない。またドラム缶もあったが、それにはアルコールが入っていた。

上級の隊員の中には、アルコールの好きな人がいた。テドゥ山やゴザ岳などの陣地にいた時のことだが、ある伍長が酒飲み友だちを捜し回った。私たちのような若い未成年の隊員に酒を勧めて「飲みなさい」と言った。その時、私は初めて酒を飲み、みんなと一緒にドンチャン騒ぎをした。

山中の陣地には、一人では行かなかった。行く時には上官が付き添ったが、上官は荷物を一般隊員に持たせ、本人は何も持たなかった。山中の陣地には一週間宿泊し、翌日祖納の兵舎に帰って来た。

護郷隊の使命はゲリラ戦だから、訓練は各山の陣地に分散し、「○○班は○○陣地」と分かれて指示通り行動したわれわれは戦争は長期戦と考えているので、教えられる通りダイナマイトなどの爆発物を持って、敵を爆破する訓練をした。

米軍が上陸して来ると想定してのゲリラ戦を考えていた。ダイナマイトや弾薬、小銃、弾丸を箱に詰めて背中に背負って

行動した。米軍が上陸して来たとなると上陸に伴い、「上原方面まで行け」との指示に基づき、午後七時に兵舎を出発した。進むにつれて時間が経過し、周囲が次第に暗くなってきた。

西表島の山中は真っ暗だった。周囲は全然見えない。通信隊員は蛍光源のある服装を着けたが、私たちは軍服に白い物を着けた。しかし、闇夜であるため、相手を全く見ることができない。暗いからといって明かりをつける訳にもいかない。

船浮要塞にいた軍関係者

暗い山道歩きでは掛け声を出し合った。そうすることで相手の場所を確認した。宇多良炭坑の川沿いを歩いている時、一人の隊員が足を踏みはずして、絶壁から落下してしまった。その時、落ちた人が私たちの所にはい上がって来るまで待て、ということになった。

護郷隊の中には、隊員を贔（ひいき）する人がいて、その人を可愛がることもあった。斥候（せっこう）は難儀な訓練の一つだが、隊員が可愛いと、その隊員を斥候には行かせない。上司は隊員が斥候に行っている間は寝ていた。私は斥候に行かされることはなかった。訓練中は昼食の時、乾パンを食べる機会が数多くあった。

護郷隊には何人かの指揮官がいて、各種訓練を指揮するが、指揮官に三〇歳代前後の若い今村中尉がいた。彼は私たちを指揮した。波照間島に渡った山下さんも一時、護郷隊にいて顔を見たことがあった。しかし面識はなかった。彼は好男子で体格はがっしりとしていた。一般隊員の私たちとは交流はなかった。

指揮官には横田大尉もいたが、私たちとの接触はあまりなかった。とにかく今村中尉が私たちと親しかった。将校には当然、専用の部屋があったが、下士官にも個室が設けられていた。私たちは星一つの二等兵だが、元気のある人は訓練を上手にこなし、一等兵に進級した仲間もいた。

訓練はさまざまあったが、泳ぐ訓練は特になかった。米軍が西表島に上陸して来たら、山中に移りテントを張って行動し、そこでゲリラ戦を展開する、ということを言い渡されていた。山中にダイナマイトを持って行き、米軍を全滅させる、という訓練に重点が置かれた。

戦後、数年間が経過してフィリピンの山奥から小野田少尉が発見され、注目されたが、彼も私たちと同じような使命を帯びて行動していたと思う。おそらく小野田少尉が習った歌と、私たちが習った護郷隊の歌は同じだったと思う。護郷隊

員は竹富村の各島から召集されていたが、なぜか波照間島からだけは来ていなかった。

歴史に例え話しは禁物だが、仮に米軍が西表島に上陸して来たらどうなっていたのだろうか。多分、訓練を受けた通り作戦を実行したと思う。米軍が上陸して来たら、との想定で訓練をしているので教えられた通り行動したと思う。

私たちは敵に被害を与え、「必ず生きて来い」と言われていた。「護郷隊員は死んではいけない。生きて帰る方法を必ず見つけて行動しなさい」というわけだった。斥候兵の任務は、情報を収集することだから、「死んだら元も子もない」と強い指示を受けていた。

私たちは曲がりなりにも兵隊の一員であったので、『軍人勅諭』を覚えさせられた。しかし覚えるのは大変だった。覚えることの出来ない人は毎日、夜中から翌朝まで、覚えるまで強制的に唱えさせられた。ひと通り覚えると、今度は抜粋して五つだけ言わせることもあった。点呼して、「一つ、軍人は忠節を尽くすべし」「一つ、軍人は信義を重んずべし」「一つ、軍人は質素を旨とすべし」などと寝る時間前に必ず言わされた。

隊員が寝る消灯の時刻は午後一〇時だった。消灯になると、すぐ就寝しなければならない。起床時刻は午前六時だった。朝起きると、すぐに点呼があるので歯磨きをする時間がない。食べ物も充分ではない中で、炊事場にバナナが置いてあることがあった。兵舎では隊員が全員起きて来るまでは不審番しかいない。残りは人はだれも起きていない。そこでバナナをこっそりと食べた人がいた。

バナナが少なくなっていることに気づいた上官は、犯人捜しに入った。バナナを盗み、食べた隊員が見付かると、隊員は営倉の中に入れられ罰を受けた。営倉の中では、板張りの上に白墨で円を巻き、そこに隊員を座らせた。隊員はじっとして動かず、何時間も姿勢を崩すことなく、同じ姿勢を保っていなければならない。

疲れた、きついなどといって寝ころぶことは出来なかった。仮に円の中からはみ出て逃げると、見張り番は着剣して撃ち殺してもよろしい、と言われていた。しかし、当番と隊員の仲が親しいと、苦しい姿を見かねて、体を横にしてもよろしい、と少々大目に見てくれることもあった。それは仲間意識の発露だった。しかし、その時、現場を上官に見られると、今度は体を崩すことを許した見張り番が体罰を受けた。

バナナを盗んで食べたということだけで、一週間も営倉に入れられるというのは軍隊の厳しさの一面だ。罰を受けた人が営倉にいる間の食事は、にぎり飯だけだった。軍隊の営倉は、現在の監獄のようなもので、盗人などの容疑者をぶち込む施設だった。

護郷隊には祖納出身の松山軍曹もいたが、彼はどんな役割を担っていたのか分からないが、いつも兵舎の近くに来ていた。私たちは食料に不自由しているので、星立の農家の田んぼから、稲俵を一俵担ぐ手伝いをしたこともあった。そして手間賃として籾をもらった。米俵を担ぐ時はふんどし一本だった。数人で米俵を運んだ。また外出する時には、「私たち何

人は、どこどこに行って来ます」と許可を得てから行動した。

◆終戦になり故郷へ

太平洋戦争は昭和二〇年八月一五日に終了したが、その頃私は八人と一緒に上原にいた。上原の畑は土壌がいいということで、そこにイモを植えるためにいた。上司の松竹兵長が食料隊長だったことから、私は松竹兵長に引率されて畑小屋に寝泊りしながら作業をしていた。

上原にいる時、マラリアにかかった。マラリアの病は終戦まで続いた。私は高熱を出しているが、自分のことは自分でしなければならない。井戸に行って水を汲んで頭の熱を冷やすこともできず、それに食料はないし、大変な思いをした。

私がそのような状態だった時に、日本はすでに戦争に負けていた。しかし、私たちには戦争に負けたとは聞かされなかった。上原にいて、「中隊に帰って来い」という命令だけだった。帰隊命令を受けて中隊まで歩くことになったが、私はマラリアにかかっているため歩くのに不自由した。そこでサバニに乗せられて上原から祖納まで戻ってきた。

祖納に戻ると、少し元気になったが、そこでは何の仕事もないので、マラリアを治すことに心掛けた。そこで井戸水を汲んで来て頭にかけ、解熱させて完治することに専念した。私はマラリアを治すのに懸命だったが、ある日、「全員、集合」との命令がかかった。その時、今村中尉が「日本は戦争に負けた」と涙声で話した。すると隊員も皆泣いてしまった。

今村中尉は「みなさんはこれから各自の故郷に帰ります。君たちは若いので故郷に帰ったら何か〝長〟のつくような人間になりなさい」と訓示した。

戦争が終わったということで菊の御紋のついた鉄砲は、その御紋を金ヤスリをかけて消し、海中に沈めた。しかし山中の陣地はそのまま放置した。陣地には機関銃や小銃の弾丸、迫撃砲弾や手榴弾、それに食糧もあった。

戦争が終わって、隊員の中で元気のある人は、負け戦さの報告を受けた翌日になって、故郷に帰った。私は九月になって小浜島に帰って来た。

戦後のことだが、曲射砲の火薬を抜き取り、ダイナマイトとして魚捕りに使用することは禁止されていた。しかし、使う人は跡を絶たず、中には使い方を間違えて身体をやられたという話を数多く耳にした。

（現住所）竹富町字小浜二〇番地
（出身地）小浜
（当時）一七歳　護郷隊

（採録）

空襲を避けて農作業

鳩間　ヒヤマ

◆敵機が飛来

鳩間島は小さい島であるから戦争中、「飛行機は来ないだろう」と、当時の島の人たちは話していた。しかし、その後の島の上空は飛行機の〝銀座通り〟になって、朝から夕方まで飛行機が激しく往復していた。多い時には一日、四回も通ることがあった。だからお年寄りは太陽が東の空から昇ると、すぐに畑に行って農作業を始めた。

農作業に遅く出掛けると、敵機が飛来して空襲を受けることになるからだ。作業はイモ植えなど主だった。イモの苗を切ろうとしている時、もし敵機がやって来ると、その場で動かずにじっとしていた。

畑地で農作業をしている時、敵機の音が聞こえると、カゴを頭から被って動かず座っていることもあった。そして敵機がいなくなると再び作業を開始し、イモカズラの苗を植付けた。主人は空襲の合間を見計らって、海に行き、魚を捕って来たりした。

◆西表島へ避難

島に爆弾が落とされて第一回目の空襲があった後、島の人たちは西表島に避難しよう、ということになった。最初は私と私の主人、私の兄、そして主人の兄、さらに友利家の人が鳩間を離れたくないということで島に残った。そして他の人は全部、西表島に避難していった。それは軍からの命令だったということを聞いた。避難した後、西表島からイモなどの食糧を取りに鳩間島に来た人もいた。

ある日、私の主人が海に行って魚をたくさん捕って来た。そして、これを魚汁に炊き上げ、隣のおばあさんや子供を呼んで一緒に食べようとしていた。その時だった。恐ろしい爆音とともに敵機がやって来た。すると私たちは全員、魚汁の食事を放置して、村の東方に口を開く鍾乳洞のウリカーであるアンヌカーに駆け足で逃げ込んだ。そこで敵機が去るまで、鍾乳洞の中にじっと座り込んでいた。敵機が見えなくなると、また自分の家に戻って食事をした。

島の人たちが西表島に避難する中で、私の家族は島に残っていたが、軍の方から、「あなたたちは鳩間島にいたら駄目だ。島の人は全員、西表島に避難しなさい」ときつく言われ、仕方なく避難することにした。避難はクリ舟を使って行った。避難の途中敵機が飛んで来ると、舟でじっと動かずに伏せた。舟には家財道具も積み込んだ。

避難生活は食糧不足で大変なものだった。時々空襲もあり、恐怖にかられることもあった。しかし、本格的な食糧難はむしろ戦後が大変だった。避難生活の間、島での作物の植え付けが出来なかったことが食糧難の原因だった。マラリアと食糧難で多くの人が死に、村人は苦しい生活を強いられた。

（現住所）竹富町字鳩間五五〇番地
（出身地）鳩間
（当時）三九歳　主婦

（採録）

避難途中に敵機来襲

鳩間昭子

◆船浦でイモなど栽培

私は、戦争中に鳩間島にもいたが、船浦に住んでいる期間が長かった。私の住家も船浦にあった。西表島には当時、ニシダという所の奥の方で炭鉱経営をしている木村工業所という会社があった。私の主人はそこの主任をしていた。会社には従業員も何人か働いていた。そういうする中に戦争が激しくなり、船も来なくなったので、社員はみんな故郷に帰ってしまった。そこで私たちは農業をしなければならなくなり、船浦に渡って小屋を造り、生活を始めた。船浦ではイモなどを栽培していた。そのうちに戦争が次第に激しくなってきた。

戦争でもっとも恐ろしく感じたのは米軍機のB29型爆撃機だった。それまであんな爆撃機を見たことがなかった。最初、飛行機が飛来してきた時、「飛行機が来た。飛行機が来た」と叫んでいた。そうしているうち、いつの間にか旋回してきてバラバラと機銃掃射をやり出した。私たちは驚いて各自逃げ回って隠れた。その時、弟は見当たらず捜してみると泣いて騒いでいた。この中で爆弾が投下されたり、いろいろなことがあった。

そんなことがあって後、B29爆撃機がまた飛来するということで、「みんな避難しなさい」という命令が鳩間島に下った。多分、軍からの命令だったと思う。そこで島の人たちはみんな避難することになった。

私の場合は西表島のニシダの奥に炭鉱跡があり、防空壕もあったから、「あそこだったらいいでしょう」ということになり、そこに行った。その時、鳩間国民学校の宇江城正喜校長もいらっしゃって、鳩間島の住民とともに避難しよう、ということになった。荷物は島から小さい舟で何回も運んだ。その日、運搬作業をし終えたら全ての荷物を運ぶことができるということで朝のうちに荷物を運び終えよう、ということになった。そして晩方には家族全員、避難させようという段取りをして朝のうちに荷物を全て運んだ。

◆宇江城校長の死亡

当初、西表島や鳩間島での空襲は、遅い時刻にあるのが普通だった。しかし、避難作業をしていたその日に限って、朝早く敵機がやって来た。宇江城校長は船浦から小舟で避難に行く途中であった。敵機は四回ほど旋回して、バラバラと機銃掃射を避難している小舟を目標に仕掛けてきた。避難中のみんなは「これはダメだ」と諦めかけたが、必死で逃げた。

機銃掃射はダッダ、ダッダと不気味な音にをたて襲ってきた。小舟の人は、機銃に撃たれないように隠れていた。すると一人の人が歩いているのが見えた。それをよく見ると、後に続く人がいてみんなで三人だった。ひとりの人は杉森といって本土の人、あと二人は宇江城校長と私の主人だった。

空襲は激しいもので、舟を捨てて逃げ出したところだったようだ。私が見たのは、その光景だった。後で聞いた話だが、

杉森という人は逃げる途中で空襲にやられて、即死となって海上に浮いていたと聞いた。空襲で宇江城校長もやられたが、呼吸をしているので救助しようと、主人らが校長をおんぶして田小屋に運んでいたところだったという。校長が空襲でやられたということは知らせがあり、その時になって機銃掃射でやられた時の状況が分かった。時刻はちょうど午前八時頃だった。

宇江城校長は空襲でやられた後、船に乗せるということだったが、船を確保するまでには午後一時頃になっていた。その後、杉森という人を探しに行くことになった。そこであちこち探したが、その人はどこかに流されていて探すことができなかった。その方は今もって行方が分からず、そのままになっている。

杉森という人は西表島の炭鉱で働いていた。その人は食糧がないので船浦に来て、他人の畑地からイモを掘ったりして盗人をやり、みんなから嫌われていた。そのような彼を可哀相だといって主人がわが家に連れて来て雇い仕事をさせていた。そして避難する時、宇江城校長とともに一緒に荷物を運んでいて空襲でやられた。

◆空襲の中に農業に従事

私の主人が勤務していた木村工業所の経営者は、木村といって那覇市西本町に米屋を営んでいた人だった。その人が船を持っていて、西表島で米や、いろいろなものを買い込み、沖縄本島に運んで商売をしていた。当初は炭鉱業が主だったが、その後手広く事業を拡張するということになり、工業所を創設して業務を展開することになった。その時、木村工業所には船が二隻あった。八重山丸と波之上丸という船名の貨物船だった。この船が八重山の人々が食べる六ヵ月分の食糧を運んでいたが、一隻は那覇港で、もう一隻は慶良間諸島沖でやられて、それで八重山には食糧が来なくなった。

木村工業所が大きな被害を受けたこともあって、私たちも農業をしなければならなくなった。船浦で農業をしながら、仕事は木村工業所にあるニシダで細々とやっていた。そうしているうちに戦争が段々と激化してきて、仕事どころではなくなった。

戦争中は空襲が激しいため、ニシダに避難していたが、昭和二〇年八月になると敵機はやって来なかった。終戦になって空襲は終わった。宇江城校長は避難する時、亡くなったが、校長は午前八時に空襲に遭い、午後一時に息を引き取ったと聞いている。場所は船浦だった。宇江城校長は船浦に家がなかったので、私の家に宿泊していた。

船浦に初めて空襲があったのは昭和二〇年の初めの頃だったが、マラリアが発生したのも昭和二〇年だった。そのマラリアは終戦後に猛威を振るった。当時は食糧もないし、本当に悲惨な状態だった。マラリアにかかった人は、避難地ではあまり亡くなっていない。ほとんどの人は、生れ島に戻ってきてから死亡した。

（現住所）竹富町字鳩間一六番地
（出身地）鳩間
（当時）一八歳　主婦

八重山義勇軍西表独立中隊の結盟式

《写真に見るわが町》

八重山義勇軍西表独立中隊

八重山では去る大戦中、独立混成第四五旅団司令部（宮崎武之旅団長）の指揮下で、軍民一体となり米軍との戦闘に備えた。昭和十九年十月十二日には初めての空襲があり、機銃掃射や爆弾投下に見舞われた。各地では地域、年齢に応じて国防組織がつくられ、生徒も戦闘要員として駆り出された。

八重山戦に先立ち、『兵役法』に該当しない年齢層によって義勇軍が組織された。沖縄県で義勇軍が発足したのは、満洲事変が勃発した二年後の一九三三年（昭和八年）のことで、八重山が最も早い。帝国在郷軍人会八重山郡連合会が推進役となり、同年一月二十二日、冨崎観音堂で沖縄連隊区司令官・石井大佐を招き、結団式が挙行された。

『八重山郡義勇軍綱領』には「義勇兵は平時にありては各自分の義務に精励し、以て産を築き有事に備ふると共に産業の開発振興に努力し、日常の生活は自給自足を旨とし、郷党の中堅を以て自ら任じ国民精神を作興し思想の善導に努む可し」等と六項目盛り込まれている。

証言によると八重山義勇軍西表独立中隊は、一九三九年（同十四年）に発足したといわれる。写真は結盟式の様子だが、場所は西表尋常小学校と思われる。しかしはっきりしない。

《戦争関係資料紹介》

『戦争体験記録』の発刊に向けては、戦争を語る資料の収集を戦災実態調査と併せて行っており、これまでに約四百点の資料が集まった。資料は写真や文書などが主だが、どれも戦争に巻き込まれた一般住民の様子を裏付けて貴重である。戦争証言と合わせてみると、戦争の実相をより鮮明に浮き彫りにできる。

第一補充兵證書
右陸軍第一補充兵役ニ編入ス
沖縄聯隊區司令官

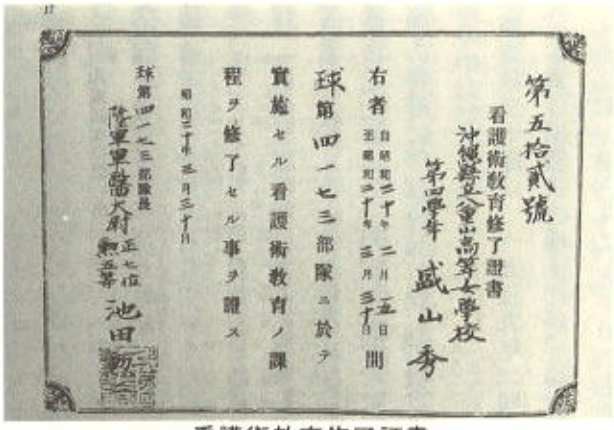
第一補充兵証書

現役兵證書
右現役兵ニ徴集シ左ノ通入營ヲ命ズ
沖縄聯隊區司令官

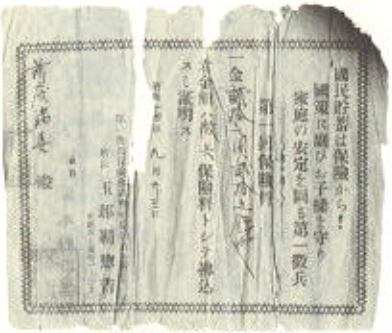
現役兵証書

罹患證明書
右ノ者上陸時頭書ノ傷病ニ罹患シ居ル事ヲ證明ス
植田貞三

罹患証明書

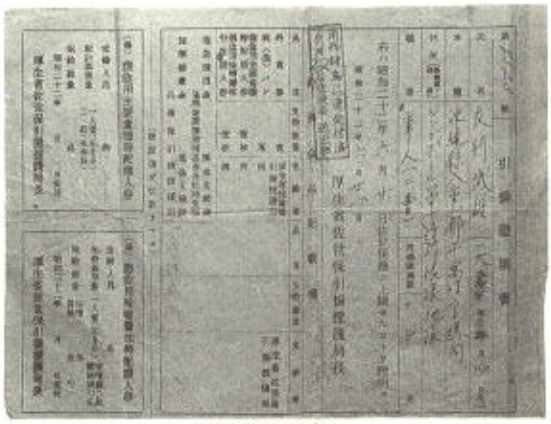

第五拾貳號
看護術教育修了證書
沖縄縣立金武高等女學校
第四學年 盛山秀
右者 自昭和二十年二月五日 至昭和二十年三月三十日 間
球第四一七三部隊ニ於テ
實施セル看護術教育ノ課
程ヲ修了セル事ヲ證ス
昭和二十年三月三十日
球第四一七三部隊長
陸軍軍醫大尉 正七位
勲五等
池田

看護術教育修了証書


國民貯蓄は保險から！
國策に順ひ子孫を守り
家庭の安定を図る第一國民兵
第一補充兵
金武村
保險料トシテ拾圓
保險料拂込證書

保険料払込証明書

ドイツの児童への葉書



引揚証明書

青年学校手帳

陸軍下士官適任証書

保険料領収書

《新聞で知る町の今昔》

招魂祭

竹富島の世持御嶽の境内に忠魂碑が建っているが戦前、同碑前で竹富村（当時）の招魂祭が盛大に開催された。新聞から

竹富村の招魂祭、クヤーク岡の忠魂碑前で盛大に執行

郡長來郡

大濱牧場視察

授來町

渡台灣へ

昭和11年11月25日付『先島朝日新聞』紙面

祭の様子を窺い知ることができる。

忠魂碑は、天皇に忠節を尽くした戦死者の忠君愛国の魂を慰め、その事蹟を顕彰するための慰霊碑の総称だが、招魂祭が同碑の前で挙行されたことは、天皇の軍隊の一員として死亡した者を英霊として靖国神社に祀ることと直結する。

忠魂碑は日清、日露戦争を契機に戦没者が急増する中で、全国に建立された。竹富村では一九二〇年（大正九年）に建てられたが、除幕式は十年後の一九三〇年（昭和五年）に、招魂祭と併せて行なわれた。以後、終戦まで毎年のように実施され、住民の戦意高揚に一役買った。

招魂祭は、死者の御霊を祀る儀式だが、戦前は各市町村とも地域を挙げて盛大に催している。竹富村の招魂祭の様子を綴った記事は、初めて昭和六年十二月八日付『先島朝日新聞』に載ったが、同紙には「竹富村招魂祭は、去る六日午前十時から、初夏のやうな晴天に恵まれ忠魂碑前で、いと盛大に挙げられた。支庁長代理大濱用雄氏、山元署長以下八警官、支庁長夫人等列席した。導師読経や祭主遺族来賓等の焼香や弔詞あり、式後余興として、青年団の角力、在郷軍人警官の銃剣術、青年団の仮装行列あり、全字挙っての観衆で大賑ひであった」とある。

記事は事象だけを書いてあるが、行間から厳粛の中にも盛り上がった行事だったことが分かる。世持御嶽の境内には昭和十三年まで村役場があり、周辺一帯は島の中心地だったことが推測できる。招魂祭には村役場の首脳が出席するほか、地域の知名士や、八重山の主だった人物が招待されている。また地域の婦人や青少年も動員され参拝を捧げている。

『先島朝日新聞』の昭和十一年十一月二十五日付の紙面では、日露戦争で死亡した人の冥福を祈るため、忠魂碑に銘記されている兵士も紹介するほか、式順を逐一書き記している。厳かな祭式の後には余興として舞踊も披露されたことが分かる。

招魂祭の性格は、沖縄県で毎年行なわれる慰霊祭に似ているようだが、「日本国憲法」に基づき、戦争を放棄して恒久平和を祈る人々の願いから正反対である。

《戦跡をたずねて》

船浮の海軍壕跡

西表島西部の船浮港は、天然の良港として明治時代から地域防衛、守備陣地の拠点として軍に注目されていた。一九〇四年（明治三十七年）頃、日露戦争当時の連合艦隊が港湾に停泊し、東郷平八郎大将が単身上陸したとも言われる。

掘り抜き壕

太平洋戦争が勃発する一九四一年（昭和十六年）には、海軍のハワイ真珠湾攻撃に先立ち船浮要塞が建設されたが、祖納、内離島、外離島、サバ崎と同様に要塞の一角に組み込まれ、陣地構築が図られた。

『船浮小学校沿革誌』によると「昭和十六年八月一日、日本陸軍、船浮要塞築城隊上陸、第四区隊長古川准尉」とある。要塞は二ヵ月がかりで急ピッチに建設された。船浮には陸軍のほか、海軍も入ってきたが、沿革誌には「昭和十六年十二月、海軍施設隊海軍兵曹長、中川伊、崎山望樓建設の為来校」と記す。また「昭和十九年八月、海軍施設萩原部隊、田島中隊長以下約百名、宿泊」ともある。

陸軍、海軍は船浮を重要な軍拠点と位置づけ、集落及び港湾を完全に軍の支配下に置いた。そこで米軍との戦闘に備えた。海軍は集落の南側に掘り抜き壕を設けた。壕跡は今も残る。

掘り抜き壕は四本あるが、一つは入口が四ヵ所にあり、幅四メートル、高さ三メートル、延長百八十メートルに及ぶ。地質は軟岩で、岩肌がむき出しになっている。残り三本も軟岩の地質に掘られているが、コンクリート被覆を施されている。

壕の幅は三メートル～四メートル、高さは二メートル～四メートル、延長は一本が十メートル、他の二本は二十メートルであまり大きくない。コンクリート被覆の壕は、発電設備を設置したといわれ、岩肌がむき出しの壕は、敵艦に体当りする特攻艇を格納した場所といわれる。

戦争中の学校沿革誌をみると、船浮の住民は陸軍と海軍に生活を蹂躙されたことが分かる。それは住民の戦争体験の証言が裏づける。学校と民家は軍の兵舎に使われ、そのため住民は暮らしの場を失い、東部の大原などへの強制移住を余儀なくされた。

大原に避難した住民は戦後になって、戻ってきたが、証言によると家屋はめちゃくちゃにされ、到底住めるような状態ではなかったといわれる。

《文化財探訪》

マシュク村遺跡

波照間島の北海岸に残る遺跡である。遺跡のすぐ北側には海が広がり、むき出しになった、ごつごつとした岩肌の岩盤は通行人の出入りを拒む。海岸線から少し内部に、カタフクと呼ばれる石積みがあるが、石垣は高さ二㍍ほどで砦を彷彿させる。

遺跡内部の石塁遺構

荒波が砕ける海岸の方向から眺めた遺跡は、外敵の侵入を防ぐ要塞のようだが、内陸部に入ると、岩盤の上に僅かながら砂利が堆積している。島人は古くから一帯をマシュク山と呼び、神高い場所と畏敬の念を抱き、容易に立ち入らなかった。

遺跡内には亜熱帯常緑樹が生い茂り、植物層も豊かである。高木が数多くあり天空を突く。遺跡内に足を踏み入れると、生い茂る大木が陽光を遮り、昼間でも薄暗い。地表には石塁遺構が縦横に曲がりくねって延び、あちこちに郭が形造られている。廓同士は通用門で結ばれているものもあれば、完全に遮断しているものもある。形状や大きさは様々である。石垣は高さ僅か五十㌢から二㍍に及ぶものと高低差は激しい。時間の流れとともに、崩れ落ちた石積みもある。石塁の中を一本の小道が東西に走る。

遺跡はこれまで発掘調査をしたことはないが、タカフク及び砂利の中から八重山式土器や陶磁器などの破片が表面採取されている。採取された遺物から八重山の考古学編年の第三期に相当するといわれる。

国立歴史民俗博物館は、平成五年度から七年度にかけて「島内諸文化の相互交流奄美・沖縄の文化とその展開」を研究課題に調査しているが、その廃村調査の中で、マシュク村も取り上げた。村跡の規模を把握するため、実測調査を行ったが測量図によって遺跡の広がりが摑めた。実測図によると遺跡は東西に約五百㍍、南北に約百五十㍍と、島内の遺跡では広大である。

遺跡の西方には、石垣島のフルスト原遺跡を小型化したような下田原城跡があり、東方には干ばつの時でも枯渇しないシムスケー（下り井戸）を抱えるシムス村遺跡があり、島の北部に古代から人々の生活の場が築かれていたことが分かる。

遺跡内には人々が祈りを捧げる拝所があるが、現在では顧みられていない。しかしプーリンの時、カミンチュが通る小さな道がある。

（通事孝作）

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
名護市史編纂室	戦後新聞記事目録
石垣市史編集室	石垣市叢書3・4・5
上江田吉二郎	金婚を迎えて
通事孝作	特別展　絵が語る明治の八重山
〃	文明のクロスロード第八号・一四号
〃	琉球王国　復帰二〇周年記念特別展
沖縄在波照間郷友会	記念誌　創立三〇周年
ひめゆり記念資料館	感想文集ひめゆり第三号
沖縄市企画部平和文化振興課	仲宗根山戸日誌②
忘勿石期成会	忘勿石　忘勿石之碑建立事業記念誌
沖縄県議会	沖縄県議会誌第十二巻新聞集成2
北谷町史編集委員会	北谷町史第三巻資料編2民俗上
〃	第四巻資料編4北谷の戦時体験記録上下
三木健	ことばにみる沖縄戦後史パート①②
三木健	新琉球史　近代・現代編
〃	神々の古層⑥来訪するマユの神
〃	神々の古層⑨世を漕ぎ寄せるシチ
〃	豊かな森の仲間たち
〃	アメリカの沖縄政策
〃	原郷の島々―沖縄南洋移民紀行
〃	惜春譜
沖縄総合事務局	沖縄総合事務局二〇年のあゆみ
全国市町村振興協会	全国市町村振興協会十年史
沖縄県農林水産部	沖縄県ミバエ根絶記念誌
宜野湾市	佐喜真興英　生誕百年記念事業報告書
県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要No.1
沖縄市	コザ市史
〃	沖縄市史第二巻資料編Ⅰ
〃	沖縄市史第八巻上資料編七・付録
〃	沖縄市史第八巻下資料編八
〃	戦争体験記
〃	間切公事帳の世界―沖縄市史資料集Ⅰ
〃	親子平和大使交流報告書第一号・第二号
〃	沖縄市制一五周年記念写真集
〃	沖縄市史資料集4　ロックとコザ
県立図書館	沖縄県史料戦後四　八重山群島議会記録
〃	県立図書館史料編集室紀要第一八号

県立図書館	県立図書館史料編集室紀要第一九号
東海大学海洋研究所	東海大学海洋研究所年報第一四号
竹富小学校	創立百周年記念誌　うつぐみ
金城誠俊	喜如嘉小学校創立百周年記念誌
ひめゆり平和祈念資料館	館報第4号
〃	感想文集ひめゆり　第4号
県立芸大付属研究所	沖縄芸術の科学　第6号
南島文化研究所	宮古、下地町調査報告書(4)
〃	多良間島調査報告書(1)
〃	南島文化第一四号
具志頭村	具志頭村史第三巻
沖縄県警	沖縄県警察史第三巻（昭和前編）
沖縄振興開発金融公庫	沖縄振興開発金融公庫二十年史
読谷村	激動　読谷村民戦後の歩み
具志川市史編さん室	中頭郡具志川小学校創立五十周年記念誌
〃	生まれじまの記　具志川市史編集資料4
〃	大正・昭和戦前の具志川を語る
〃	海外に雄飛した三兄弟の奇跡
南風原町	宮平が語る沖縄戦
〃	大名が語る沖縄戦
八重山博物館	八重山博物館紀要第3・4・5・6号
石垣市教育委員会	石垣貝塚
〃	平川貝塚

県立博物館	子どもの世界　沖縄本島地区編
名護市史編纂室	羽地の民話
〃	折口信夫関係ノート
今帰仁村	なきじん研究3　今帰仁の歴史
宮平誌編集委員会	宮平誌
沖縄税理士会	三〇年のあゆみ
名護博物館	企画展⑧　名護やんばるの野鳥
〃	企画展⑨　「塩」屋我地マースを見直す
〃	企画展⑩　自然の中で生きる虫たち
〃	企画展⑪　ピトゥと名護人
〃	ぶりでい子ども博物館3・5・6・7
〃	名護市墓分布形態調査報告書久志地区の墓・屋部地区の墓・屋我地区の墓・羽地地区の墓
三木健	流れ坑夫　大井兼雄さんについての覚書
グローバル企画	大田昌秀教授退官記念論文集「沖縄を考える」
〃	虹立つ島
〃	新聞で見る伊江島の動き
〃	沖縄対米請求権問題の記
〃	アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史
県立芸大	沖縄県立芸術大学紀要No.2
石垣市史編集室	石垣市史叢書6
〃	石垣市史叢書7
渡名喜明	琉球列島における宗教関係資料に関する総合

ひめゆり平和祈念資料館	調査・総合目録編
県立図書館	感想文集ひめゆり第5号
親盛長明	沖縄県史料　近代6　移民名簿Ⅱ
東村役場	沖縄介輔史　沖縄介輔制度四〇周年記念誌
県立博物館	東村移動展「美術展・写真展」
大浜永亘	特別展　子どもの世界
沖縄市企画部	琉球孤の世界
南風原町	戦争体験記録
県立博物館	もうひとつの沖縄戦　南風原の学童疎開
〃	沖縄県立博物館紀要第二〇号
斜里町	子どもの世界　宮古・八重山編
〃	知床博物館研究報告第一五集
〃	峰浜のむかし　知床博物館第一五回特別展
〃	知床の人と自然　郷土学習シリーズ⑰
〃	ウトロの自然と歴史郷土学習シリーズ⑭
〃	斜里町博物館要覧
〃	知床博物館研究報告
〃	斜里町の教育一〇〇年
南風原町史編集室	山川が語る沖縄戦
〃	照屋が語る沖縄戦
〃	被害者の沖縄戦
〃	津嘉山大綱曳き調査報告書
県立平和祈念資料館	館報No.8

ひめゆり平和祈念資料館	館報第5号
浦添市立図書館	浦添市立図書館紀要No.4・No.5
喜舎場一隆	琉球大学法学部紀要
大宜味村	大宜味村文化財調査報告書第3集　大宜味村
知念村	知念村史第三巻　戦争体験記
県立芸大	沖縄芸術の科学第七号
与那国遥	ウエーバーの社会理論と沖縄
糸満市	写真と年表に見る糸満の現代の歩み
崎山直	戦史に顧みる　八重山の戦時期ノート
県教育委員会	沖縄県文化財調査報告書第一一五集　カイジ浜貝塚
名護市教育委員会	宮城真治史料⑧宮城真治民俗調査ノート
那覇市議会	議員の議会活動の記録（祖国復帰後編）
中城村	中城村史第三巻資料編2

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

編集者名	図書名	発行所名
谷川健一	地名と風土	小学館
有川董重	南島民俗文化史料	沖縄郷土文化研究会
吉岡幸雄編集	染織の美（18）	京都書院
西岡照太郎他	沖縄復帰の基本問題	国立国会図書館
国分直一	南島先史時代の研究	慶友社
南方同胞援護会	沖縄復帰の記録	南方同胞援護会
丸杉幸之介	沖縄離島物語	古今書院
安里要江・大城将保	沖縄戦ある母の記録	㈱高文研
琉球新報社編	沖縄学童たちの疎開	琉球新報社
安仁屋政昭編著	沖縄戦再体験	平和文化
琉球新報社	証言沖縄戦	琉球新報社
毎日新聞特別報道部	沖縄戦争マラリア事件	東方出版
取材班		
大田昌秀編著	総史沖縄戦	岩波書店
球陽研究会編	球陽	角川書店
松村明監修	大辞泉	小学館
沖縄・戦後五〇年の歩み編集委員会	沖縄・戦後五〇年の歩み	沖縄県
台湾教育会	台湾教育会雑誌全十一巻 別巻一	ひるぎ社
大田昌秀監修	写真集 沖縄戦	那覇出版社
那覇出版社編集部	写真記録 平和の礎	那覇出版社
沖縄タイムス	沖縄タイムス縮刷版	沖縄タイムス社

業務日誌

◆一九九五年（平成七年）

九月二〇日
・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、二一日まで）

九月二二日
・図書備品購入契約ロマン書房本店（七冊）

九月二七日
・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、二九日まで）

一〇月二日
・町史編集室内定例会議、一〇月業務予定検討

一〇月五日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、六日まで）

一〇月一一日
・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、一三日まで）

一〇月一九日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、二〇日まで）

一〇月二四日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、日帰り）

一〇月二六日
・竹富島種子取祭取材のため、出張（職員一名、二七日まで）

一一月二日
・町史編集室内定例会議、一一月業務予定検討

一一月六日
・戦災実態調査のため、黒島へ出張（職員一名、七日まで）

一一月七日
・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、九日まで）

一一月九日
・戦災実態調査のため、小浜へ出張（職員一名、一〇日まで）
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、一一日まで）

一一月一四日
・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、一六日まで）
・行政文書分類編纂保存業務契約　（南山舎）

一一月二一日
・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、二二日まで）

一一月二八日
・新沖縄県史調査協力員会議及び資料収集のため、那覇へ出張（職員一名、二九日まで）
・戦災実態調査のため、小浜へ出張（職員一名、三〇日まで）

一一月三〇日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、一二月一日まで）

一二月二日
・東南アジア史学会研修及び資料収集のため、那覇へ出張（職員一名、四日まで）

一二月六日
・町史編集室内定例会議、一二月業務予定検討

一二月八日
・行政文書分類編纂保存業務終了
一二月九日
・第十一回竹富町史編集委員会開催
議題一、竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」全体構成について。二、竹富町史第十一巻資料編「新聞集成Ⅲ」について
一二月一四日
・戦災実態調査のため、黒島へ出張（職員一名、一五日まで）
・図書備品購入契約球陽堂書房本店（六冊）
一二月一九日
・沖縄戦終結五〇周年事業、植樹祭参加のため西表へ出張（職員二名、日帰り）
一二月二〇日
・竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」の印刷製本入札の説明会及び入札執行。株式会社南西印刷が落札。

一九九六年（平成八年）
一月四日
・町史編集室内定例会議、一月業務予定検討
一月九日
・沖縄県統計資料の印刷製本図書購入契約。有限会社沖縄マイクロセンター（七〇冊）
一月一一日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、一二日まで）
一月一二日
・図書備品購入契約　三星書房本店（一冊）
一月一五日
・第一八回市町村管理者研修会のため那覇へ出張（職員一名、一八日まで）
一月一六日
・地元紙新聞の上製本契約
グローバル企画印刷株式会社（一〇三冊）
一月一七日
・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、一九日まで）
一月一九日
・図書備品購入契約　文教図書（二冊）
一月三一日
・図書備品購入契約　那覇出版社（一冊）
二月一日
・町史編集室内定例会議、二月業務予定検討
二月五日
・図書備品購入契約　でいご印刷（一五五冊）
二月八日
・沖縄県地域史協議会研修会及び竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」受注会社南西印刷株式会社との業務打ち合わせのため那覇、名護へ出張（職員二名、一〇日まで）
戦争体験生原稿送付（第一回）

二月一三日
・図書備品購入契約　那覇出版社（二冊）
・図書備品購入契約　ひるぎ社（一一巻）
二月二三日
・戦争体験生原稿送付（第二回）
二月二六日
・戦争体験生原稿送付（第三回）
二月二八日
・図書備品でいご印刷より納本（一五五冊）
三月一日
・沖縄県統計資料の印刷製本図書　有限会社沖縄マイクロセンターより納本（七〇冊）
三月四日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、日帰り）
三月六日
・戦争体験生原稿送付（第四回）
三月七日
・町史編集室内定例会議、三月業務予定検討

編集後記

◆『竹富町史だより』第九号が出来上がりました。今号は第十二巻「戦争体験記録」を今年度に発刊することに鑑み、「戦争体験記録特集号」にしました。「戦争体験記録」の発刊に向けては第十一回編集委員会で最終的に編集構成を決定しました。編集は読者の利用しやすさに配慮し島、地区ごとに体験記録を配列しました。

◆戦後五〇年―。戦争体験者の高齢化が進み、戦争体験の風化が叫ばれて久しいが、恒久平和を希求し、反戦平和の立場から戦争の実相を明らかにし、後世に残すことは意義あることです。「戦さ場の実相」に盛り込まれた証言に接する時、多種多様な戦争体験があったことが分かります。戦争体験者人数分の証言記録があることは事実です。「戦争関係資料」は戦争を知る物的資料です。それは戦争を語っています。

竹富町史だより　第9号

平成8年3月29日　発行

編集発行　竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎09808－2－9985

印刷　八島印刷